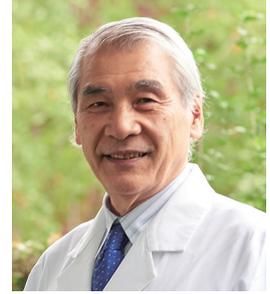


ドクター林田からのメッセージ 41

高齢医の役割



聖路加フレンズ 林田 憲明

家にいて急にめまいがして息苦しくなった人が、それがどこから来るのか、どのような治療が必要なのかを自分で判断できる人はほとんどいません。そのような時にいきなり大病院の受付の前に立っても、どのような専門医に相談したらいいのか分からないでしょう。そんな時に聖路加フレンズの会員の方たちは、私のところへ連絡をくれます。「こういう症状が出たけれど、どうしたらいいか」という相談があると、「これは病気かどうか」「もし病気ならば、どの専門医にかかるのが最も適切か」という二つの判断を早急にすることになります。例えば“息切れ”を訴える患者さんでも、その原因は呼吸器疾患、心臓病、貧血、高齢による呼吸筋の衰え、時には心理的ストレスなどさまざまなのです。ですから、私の仕事は大病院の中のホームドクター（General doctor）のようなものだと言えるでしょう。つまり患者さんの現在の症状だけでなく、その人の今までの病歴、職業、生活習慣、家庭内の問題など、なるべく多くの情報を集めて総括的に見渡し、診療方針を素早く決めているのです。

これは最も基本的な医者の仕事で、この点がおろそかだと良い医療にはなりません。けれども全体を見渡す一般医的な視野がどんなに広くても、疑った病気を最も能率的に診療する専門の医療技術がなければ効果のある治療には結びつきません。医療では「一般」と「専門」の両方が必要になるのです。私が非常に幸運に思っていることが二つあります。その一つは、聖路加には診療を信頼して任せることのできる多くの優れた専門医がいること、もう一つは、私が「この専門医に診療を頼もう」と決めその医師に連絡すると、すべての医師が快く引き受けてくれることです。聖路加では「一般医」と「専門医」の協力による適切な医療が成功していると言えるでしょう。現在日本にある数多く的大病院の中でも、この両者の組み合わせがうまく機能しているところはまだそれほど多くありません。ご存知のように聖路加フレンズは、

日野原重明先生が大病院の中で一人ひとりの患者さんの問題にこたえるために1998年に創設されました。私は40年間循環器医として働いたあと2011年からこの「ホームドクター」の役目を仰せつかりました。当時約1,700名の会員数が現在は2,000名を超えている現状は、日野原先生に先見の明があったという証でしょう。

いまでも私が専門とした心臓病や高血圧症の患者さん方と、引き続きお付き合いさせて頂いているのは本当に嬉しいことです。皆さん既に70～80歳代で、生死を分ける治療を受けられてから30年ほど経過している方もおられます。そして現在もお元気で、専門医を定期的に受診された帰りに（あるいはわざわざ別の日を予約して）私の外来に年3～4回ほど来室されます。お話する内容と言えば、現在の体調、専門医から受けている治療内容、別の医療的な相談などですが、時には治療を受け始めた頃の昔話、入院時の辛かった話、あるいは現在の生活や趣味、お子さんやお孫さんなどご家族のこと、将来のことを10～15分ほど楽しく話されて帰られることもあります。

私は医者になりたての頃、何でもできる医者を夢見ていました。しかし数年経つうちにふと気がつく、より良い治療のできる専門医を目指すために日夜懸命に働いていました。そしていつしかその時期も過ぎて高齢に達した今、患者さんの悲しみ、不安、心細さなどの気持ちに“寄り添うことのできる医療者”になろうとしているように思います。長年医療にかかわっていると、病気の治療だけでは解決できない問題が実はたくさんあることに気が付くからなのでしょう。病気の後ろに心配し、悩み、決断しかねている患者さんの姿が見えてくるのです。そんな事を考えると、たとえ直接その診療にかかわらなくとも、以前からその患者さんのことをよく理解している医療者が、あたかも家族のように、友人のように、応援団のように黙ってそばにいて見守っている、そんな医療ができたならと望むようになりました。